

アカデミック・ジャパニーズ・グループ(AJG)は 何を目指し、何を積み重ねることができたのか —今までの会の活動を振り返って—

堀井恵子

要旨

アカデミック・ジャパニーズ・グループ(AJG)発足から現在までに行われた 17 回の研究会の概要を振り返り、規約にある「AJG の目的・活動の視点」から考察することで、AJG の積み重ねと課題を探る。理念構築という意味では、他分野の講師による先端的な講演・ワークショップにより、「言語による学びの構築」という多角的な視点の AJ をとらえることができ、同時に多彩な教育方法にも触れることができた。一方、会員による留学生のためのアカデミック・ライティング、アカデミック・リーディングについてなどの詳細な紹介、ワークショップも行われ、AJ 研究紹介と合わせて狭義の AJ の教育方法例・教育方法論が展開された。日本語教育と国語教育の連携、国内日本語予備教育機関との連携、海外の研究者との連携も行われた。

キーワード

アカデミック・ジャパニーズ、ことば、学び、論理的思考、問題発見解決能力

1. はじめに

アカデミック・ジャパニーズ・グループは、2004(平成 16)年 1 月 9 日、日本語教育学会初のテーマ領域別研究会として、登録された。会の目的・活動は以下のように規約にある。

(目的)

第 1 条 本研究会は、「アカデミック・ジャパニーズ(大学・大学院などの高等教育機関での学習・研究に必要な日本語力)」の理念の構築と教育方法論の研究を行い、それに基づいて教育内容体系・教材例・教育方法例を提起することによって、大学等での日本語教育・日本語表現教育および大学入学前の日本語予備教育の質的向上に貢献することを目的とする。

(活動)

第 2 条 本研究会は上記の目的を達成するために次の活動を行う。

- (1) 「アカデミック・ジャパニーズ」とは何か(理念)、その教育はいかになされるべきか(方法論)について、多角的な視点から継続的に討議・考究する。
- (2) 「アカデミック・ジャパニーズ」教育の連続性をめざして、国内の大学入学前日本語予備教育機関と大学の日本語教育機関との連携を深め、共同研究・教育実践を行う。
- (3) 上記(1)、(2)の点について、海外の日本語教育研究者と連携し、共同研究・教育実践を行う。

- (4) 日本語母語話者の言語表現教育の質的向上に取り組み、日本語教育と国語教育との連携を含めた、言語教育全般に提言しうる研究・実践を行う。

この研究会結成の母体は、2002(平成14)年から2004(平成16)年にかけて、研究代表者、門倉正美を中心に行われた共同研究：科学研究費補助金基盤研究「日本留学試験が日本語教育に及ぼす影響に関する調査・研究——国内外の大学入学前日本語予備教育と大学日本語教育の連携のもとに」にある。この科研については中間報告書、成果報告書に詳細が報告されているが、日本留学試験「日本語」科目試験問題の分析と対策を提起し、アカデミック・ジャパニーズ(以下AJとする)をめぐる議論を深め、AJ研究に関する日本語学校と大学・大学院の連携、海外の日本語教育機関との連携を培ってきた。

AJG発足後の、2004年10月に行われた日本語教育国際研究大会における、曹大峰、鄭起永、門倉、堀井によるワークショップでは、AJという言葉が多くに関心と市民権を得てきたことが感じられるものであった。

その後、2009年3月までに、AJGは17回の研究会を行ってきた。本稿では、その17回の研究会の内容をふりかえり分析することで、この研究会が何を目指し、何を積み上げてきたか、そして、これからのAJGの課題を考察したい。

2. AJGは何を目指し、何を積み重ねることができたのか

AJGが目指してきたものは、規約の目的にあげた以下である。

「アカデミック・ジャパニーズ(大学・大学院などの高等教育機関での学習・研究に必要な日本語力)」の理念の構築と教育方法論の研究を行い、それに基づいて教育内容体系・教材例・教育方法例を提起することによって、大学等での日本語教育・日本語表現教育および大学入学前の日本語予備教育の質的向上に貢献することを目的とする。

以下の表1は2004年5月から2009年2月までに行われた17回の研究会内容のリストである。

表1

回	年月日	テーマ	担当者	
1	2004.5.17		これまでの活動、今後の活動についての問題提起	発起人一同
2	2004.7.10	講演 (WS)	日本人学生を対象とした大学生の基礎学力判定 テストと日本語リメディアル教材	小野博
3	2004.9.18	講演	日本語表現法科目の歴史と課題	筒井洋一
4	2004.12.11	講演	母語教育の日米比較と大学での日本語教育 —国語科教育の視点から	井上尚美
5	2005.3.5	講演	Developing Research in English Academic Interaction	ヘレン・マ リオット

6	2005. 6. 19	WS	アカデミック・ライティングの過程にピア活動を取り入れる方法	池田玲子
7	2005. 10. 15	WS	日本語ディベートワークショップ	太田昌宏
8	2006. 2. 25	発表	留学生の講義理解ストラテジーについての研究	麻生貴美
		発表	作文過程におけるメタ認知支援の効果	高橋薫
9	2006. 6. 24	WS	大学での協調的学びの構築—認知科学の立場からの実践	三宅なほみ
10	2006. 11. 18	発表	人文系大学院留学生の文章課題遂行過程の研究	宮崎七湖
		WS	実用文の書き方ワークショップ：ことばの教師のための体験 圧縮版	向後千春
11	2007. 2. 3	対談	メディア・リテラシーは、ことばの教育をどのように豊かにするか？	中村純子 門倉正美
		WS	公共広告機構CMを素材としたワークショップ	中村純子
12	2007. 6. 16	発表	口頭発表用レジュメの作成指導について	茂住和世
		発表	<視読解>としての図解——読み書きに図解を用いる試み	門倉正美
		発表	大学での現実の読みにつながる読解学習の試み	二通信子
13	2007. 10. 27	発表	初級からのアカデミック・ジャパニーズ教育	嶋田和子
		WS	新しい「読み・書き」（プラス「聞く・話す」）の教え方	吉田新一郎
14	2008. 2. 9	発表	留学生の就職支援のためのビジネス日本語教育とアカデミック・ジャパニーズ	堀井恵子
		WS	『日本語を書くトレーニング』『日本語を話すトレーニング』とアカデミック・ジャパニーズ	野田尚史
15	2008. 6. 14	講演	「アカデミック・ジャパニーズ」を開放する—JSLの子どもと大学生を対象にした二つの実践の重なりと相違点—	川上郁雄
16	2008. 11. 8	発表	発話思考法を用いた、日本語学習者の作文過程の検討	石毛順子
		WS	論文読解・作成への導入—サンプル論文を補助教材として—	佐藤勢紀子 大島弥生
17	2009. 2. 7	WS	参画教育とラベルワーク	林義樹

研究会の概要と AJG の目的・活動の視点からの分析・考察(資料参照)から見えてきたものは以下であった。

1. 日本語教育以外の他分野の講師(表網掛部分)による先端的な講演・ワークショップ(第2, 3, 4, 5, 7, 9, 11, 13, 17回)が多かったが、それにより、日本語教育の中からは見えてこない、(大学)教育における言語の果たす役割を知ることができた。また、日本語教育の分野でも会員外のAJではない切り口の講演・ワークショップ(第6, 14, 15回)からも、多様な学びへのアプローチを知ることができた。したがって、AJの理念構築という意味では、留学生に対する日本語教育の範囲の狭義のAJだけではなく、「言語による学びの構築」という多角的な視点のAJをとらえることができ、同時に多彩な教育方法にも触れることができた。これは、とかく狭くなりがちなAJを本質からとらえるという点で他の研究会では見

られないものとして、大いに、評価される。

2. 一方、AJG を担う会員の中からの先端的な AJ 研究(第 2, 14, 16 回)や若手の AJ 研究(第 8, 10, 12, 16 回)なども活発に行われ、AJ 研究の促進に貢献した。

3. 当初は講演という形態で始まったが、6 回目からは主にワークショップ(表網掛部分)という形態で行うようになった。これは自然な流れでもあったが、研究会自体をより学びが生まれる**参加型**にしたいという意図でもあった。教育方法や教材に体験的に触れることで学習者の視点からの学びを確認することができ、講師にとっては、有効なフィードバックを得られる機会ともなっている。

4. 同時に、リメディアル教材、初年次教育教材、ピア活動の教材、ディベート教材、ジグソウ教材、実用文の書き方教材、アカデミック・ライティング教材、書く/話すトレーニングなどの教材やピア、ディベート、メディア・リテラシーやラベルワーク体験など豊富な**教材、手法**に触れることができた。どれも、AJ 教材例・教育方法例という点で刺激的なものであった。

5. 上記から、日本語母語話者対象の言語表現教育実践についての講演・ワークショップが多かった。AJG では AJ は留学生のみの問題ではないと捉え、むしろ、留学生のために始まった AJ を**日本語母語話者の言語教育の質的向上**にまで広げようと考えているからである。一方、留学生のためのアカデミック・ライティング、アカデミック・リーディングについてなどの詳細な紹介、ワークショップも行われ、AJ の具体的な教育方法例・教育方法論が展開された。

6. 日本語教育と国語教育の連携(第 4, 11 回)、国内日本語予備教育機関との連携(第 13 回)、海外の研究者との連携(第 4 回)も行われた。

以上から、17 回の研究会の中で、AJ という縦糸を軸に AJG ならではの多様多彩な学びが連続性を持って展開され、AJ の拡がりを産み出すことができたといえよう。どの研究会も新たな知的接点がありおもしろかった。また、この期間には、研究会以外でも学会レベルでの AJ 会員による AJ 研究活動が活発であったことも述べておく。AJG 並びに AJ 会員によって AJG の目的は積み重ねられ、大学等での日本語教育・日本語表現教育および大学入学前の日本語予備教育の質的向上に少なからず貢献してきたといえよう。

3. AJG の課題

AJG がその目的に沿って、積み重ねをすることができているがわかったが、近年、AJ に関する論文・発表が日本語教育学会などにおいて数多くみられることもあり、この辺でこの積み重ねを生かし、統括的視点から AJ の理念を議論し再考してみることも意義あることではないだろうか。

目的には掲げられていないが、アカデミックな接触場面という捉え方からの研究も狭義

のAJでは取り上げていく必要があると思われる。

また、研究会としては、引き続き他分野の先端的な「学び」についての知見をワークショップ形式で体験することとともに、狭義の具体的なAJ教材例、教育方法例についての発表・ワークショップも会員からのニーズが多く同時に重要であると思われるので、会員の中からそれらを募り、バランスの良い運営をしていけたらと思う。

5年目を迎え、Web版ジャーナルも誕生する。AJGの持続における更なる充実が期待される。

資料：17回の研究会の概要とAJGの目的・活動の視点からの考察

2004年5月23日から2009年2月7日までに行われた17回の研究会について、概要を振り返り、AJGの目的・活動の視点から考察し、資料としてまとめた。各研究会の初めには、会員同士の情報交換タイムが30分程度設けられ、会員の活動についてや著書についての紹介が行われているが、ここでは割愛した。また、毎年6月の研究会の前には総会が行われていることも加えておく。

第1回AJG研究会 2004年5月23日(日) 17:00-18:30 東海大学

AJGのデビューは2004年度日本語教育学会春季大会終了後であった。規約の承認、役員を選出のあと、日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズについて、発起人によるこれまでの活動、今後の活動についての問題提起が以下のように行われた。

①AJGの趣旨と活動内容について：門倉正美、②パネル・セッション「アカデミック・ライティング教育の課題」を終えて：二通信子、③日本留学試験の問題点とアカデミック・ジャパニーズ基礎力との関係：堀井恵子、④日本留学試験「記述」の問題点と今後議論していくべき事柄について：村上京子、⑤日本人学生のAJ教育との連携：三宅和子、⑥大学・大学院留学生のためのAJのテキスト：佐藤勢紀子、⑦AJ基礎力育成のための問題集作成について：佐々木瑞枝、⑧今後の活動について

第2回AJG研究会 2004年7月10日(土)14:00-17:00 武蔵野大学

講演：小野博（メディア教育開発センター）

テーマ：日本人学生を対象とした大学生の基礎学力判定テストと日本語リメディアル教材

[概要]近年の大学生は学力が低下しているといわれているが、**基礎学力判定テスト**を開発、学力が足りない学生のための**リメディアル教育教材**も開発した。講義で先生の言っていることがわからない、どうやって勉強すればよいのかわからない、わからないからやらない、やらないからますますわからなくなるという悪循環を断ち切るにはこれまでの「国語」とは違う方法が効果的。教材は**気づかせる、考えさせる、やる気を出させる、おもしろい、自信をつけさせるための工夫**をした。指導から**協働**を目指し、①学生同士のやり取りを中心としたアクティビティコースは、**ずけずけ図形、4コマ漫画、ひらがな文、言葉あて**、②ドリルコースは学習ストラテジーを身につけるため、**整序問題(文章構成能力)、アウトライン、正しい漢字と用語・表現(反復ドリル)**からなる。

[AJGの目的・活動の視点からの考察(以下、考察とする)]AJの理念構築と方法論という点

では、**アカデミック・サバイバル・ジャパニーズ**という位置づけで大学生の学力低下問題に基礎学力判定テスト開発とリメディアル教材開発という具体的な対策を実践している。AJに至る前段階の基礎力についてや日本人学生との共通点の認識などAJの明確化に示唆的であった。

第3回研究会 2004年9月18日(土) 15:00-17:30 東京海洋大学

講演：筒井洋一(京都精華大学)

テーマ：日本語表現法科目の歴史と課題

[概要]大学のユニバーサル化、大学設置基準の大綱化、教養部廃止の中、富山大学に言語表現科目を新設、その後、高知大学の日本語技法をはじめ、全国 2/3 の大学で実施されている**日本語表現科目**設置の火付け役となった経緯の紹介。日本の教育に欠けていた部分を補うべく**国語から日本語**への発想で、全学必修、30人クラスの実習的な**初年次教育**は**楽しく面白くわかりやすく役に立つもの**を目指す。今後の課題は、①担当者の確保 ②専門家の役割 ③講義内容・方法の統一性、他科目との連携(読み、書き、話す、調べる)である。多数の教員が参画できるシステムとして**大学カリキュラム全体の中での位置づけ**が重要である。

[考察]活動にある「日本語母語話者の言語表現教育の質的向上に取り組み、言語教育全般に提言知る研究・実践」の例として、日本語表現科目・初年次教育の取り組みは合致する。これらの教育を行える担当者として**AJを理解した日本語教師の可能性**も議論された。

第4回 AJG 研究会 2004年12月11日(土) 14:00-17:00 武蔵野大学

講演：井上尚美(創価大学)

テーマ：母語教育の日米比較と大学での日本語教育—国語科教育の視点から

[概要]日本の**国語教育**の伝統は**文学教育重視**(文学青年が国語の先生になることの偏り、理数嫌い)で、生活綴り方、行事作文は**論理的文章**ではない。**話し言葉**も軽視されてきた。第二次世界大戦後、アメリカ方式が導入され話し言葉重視、作文も実用文、意見文が取り入れられたが、全体に広がったとは言えない。今後は①**批判的に聞く(読む)能力**、②筋の通った論文を書く能力、③**ディベートやプレゼンテーション**のできる能力が期待される。

[考察]日本語教育と国語教育との連携という意味で、長年の国語教育実践の中で「**論理的思考力の育成**」を一貫して主張されてきた点、近年は、メディア・リテラシーの導入にも尽力されている点で、AJに必要な**批判的思考、論理的思考**の重要さなどを提起している。

第5回 AJG 研究会 2005年3月5日(土) 14:00-17:30 東京大学

講演：Helen Marriott(ヘレン・マリョット)(モナシュ大学)

テーマ：Developing Research in English Academic Interaction

[概要]オーストラリアの留学生の英語での**アカデミックなインターアクション**力を高めるための研究を紹介、ステレオタイプではなく**観察**から問題点を浮き彫りにし、解決策を図ることの重要さを述べた。(講演は英語で、翻訳付きのレジュメ配布のうせみバイリンガル)

[考察]アカデミックな接触場面という視点での研究により、アカデミックスタイルの違いなど異文化比較からAJを考えることの示唆を与えられた。海外の日本語教育研究者の連携という点で活動内容に合致するが、異文化比較の視点からのAJというとならえ方は目的・活動には明記されていないが重要な点ではないだろうか。

第6回 AJG 研究会 2005年6月19日(日) 12:45-17:00 東京海洋大学

ワークショップ: 池田玲子(東京海洋大学)

テーマ: アカデミック・ライティングの過程にピア活動を取り入れる方法

[概要]アカデミック・ライティング(レポート作成)の過程にピア活動を取り入れる実体験を通じて、ピア活動デザインのポイントを考え、その過程でグループ内の多様な意見を共有、各自の視点から実践現場への応用を考えることを目的に、思考・構想マップ、アウトライン第1稿、提出前本文文章全体についてのピア活動を体験し、振り返りを行った。理論とこれまでの研究の流れを確認したうえで、WSで体験することでピアの意味をより理解することができた。ピア・レスポンスが書き手のプロセスを重視しながら読み手も重視することもポイントである。

[考察]AJ教育の方法論として、AJのさまざまな場面にピア活動を入れることによって学びが確かなものになる可能性を認識、また、アカデミック・ライティングの流れについても実践への足掛かりとなった。

第7回 AJG 研究会 2005年10月15日(土) 14:00-17:15 武蔵野大学

ワークショップ: 太田昌宏(NPO 法人全国教室ディベート連盟 常任理事)

テーマ: 日本語ディベートワークショップ

[概要]ディベートの効果についてはよくいわれているが、実際には日本語の授業で取り入れられていないことが多い。日本語ディベートによる教育実践者が、ディベートのコンセプトと肯定立論・非定立論・反対尋問などのやり方を丁寧に紹介した後、ミニミニ練習試合を行った。ワークショップが効果的であった。

[考察]AJ教育の方法論として、論理的思考を身につける手法としてのディベート活用の可能性を理解、AJ実践への足掛かりとなった。

第8回 AJG 研究会 2006年2月25日(土) 14:00-17:00 武蔵野大学

テーマ: 講義理解ストラテジーと作文過程支援

発表1 麻生貴美(早稲田大学大学院)「留学生の講義理解ストラテジーについての研究」

発表2 高橋薫(お茶の水女子大学大学院)「作文過程におけるメタ認知支援の効果」

[概要]会員による研究発表。

麻生: アカデミック接触場面における留学生のインターアクション問題やストラテジーとしての調整行動を、再生紙劇法・インタビュー・学習日記などから明らかにし、マイクロプロセス(聴解)・事前調整の重視をあげ、個々の学習者にあったストラテジー習得への意識

化を課題としている。

高橋：日本語母語話者児童を対象に作文過程での内省を促す支援(ひらめきライター使用)の効果を個人内横断的变化観察と群間比較順実験によって検証した。

[考察] 留学生を対象としたアカデミック接触場面の研究と作文過程の内省支援の研究はどちらも具体的な AJ 研究である。AJ 研究の多様な拡がりの一面を見ることができた。

第9回 AJG 研究会 2006年6月24日 (土) 14:30-18:30 東京海洋大学

『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房刊 予告編：門倉正美
ワークショップ：三宅なほみ氏 (中京大学)

テーマ：大学での協調的学びの構築—認知科学の立場からの実践

[概要] 認知科学の知見から学びの仕組みをとらえ直し「学習科学」として、協調学習を利用し、学生が自身で知識を作り上げることを目指した大学での実践の紹介と Jigsaw 形式の授業のワークショップによる体験と振り返り。「他の人に自分の意見を言うことが自分の学びになるだけでなく他の人のリソースになることを理解し協調的に学習するスキルを身につける」ための、詳細な授業実践例や、スキーマを活用する理論と綿密な計画による実践と研究についての紹介は大いに刺激的であった。

[考察] AJ の理念構築と教育方法論の面から、「学び」について、心理学という近接分野の科学的知見から示唆されるものは多い。協調学習の効果や綿密な研究手法も興味深かった。

第10回 AJG 研究会 2006年11月18日 (土) 13:00-17:30 武蔵野大学

会員による発表と討論：宮崎七湖「人文系大学院留学生の文章課題遂行過程の研究」

ワークショップ： 向後千春氏 (早稲田大学人間科学部)

テーマ：「実用文の書き方ワークショップ：ことばの教師のための体験 圧縮版」

[概要]

宮崎：人文系大学院留学生が文章課題(論文要約)を遂行していく過程を、学習ダイアリー、各種インタビュー、参与観察、草稿/最終原稿などから質的に調査、ニューストブニーのアカデミック・インターアクションと言語管理理論の枠組みで分析した。対象者は課題遂行に文法外コミュニケーション能力の側面についての留意が多く、クラスでのインターアクションを通じて認識を深めていったなどの結果となった。

向後：実用文の目的である人を動かす力を持った文章を書くための技能を、参加体験型のグループによる学びによって身につけるワークショップの短縮版。読者とテーマをイメージ→構想マップ→ノンストップライティング→パラグラフ化→構成→ピアレビュー→書きなおし・タイトルをつけ皆に読んでもらってコメントをもらうという流れで、書くことのハードルを下げ、型を身につける。

[考察] 宮崎の、具体的な留学生の文章課題推敲課程の研究も教育方法論につながる AJ 研究であった。ワークショップは AJ の理念とアカデミック・ライティング教育の方法論につながるものであった。実用文という切り口でわかりやすい文章を書くことも AJ。

第11回 AJG 研究会 2007年2月3日(土) 14:30-17:30 武蔵野大学

対談：中村純子+門倉正美(横浜国立大学留学生センター教授)

テーマ：メディア・リテラシーは、ことばの教育をどのように豊かにするか？

ワークショップ：中村純子(川崎市立宮前平中学校 教諭)

テーマ：公共広告機構CMを素材としたワークショップ

[概要] テレビ、インターネット、携帯といったメディア表現が遍在している現在、「世界を読み解く教育」を本旨とする「ことばの教育」は、「世界を表現」しているそれらのメディア表現の「読み・書き(リテラシー)」に関わる必要があるという趣旨の対談と、メディア・リテラシーがことばの教育をどのように豊かにしていくかについて公共広告機構の映像を素材にしたワークショップで実体験しながら考察。

[考察] 日本語教育と国語教育の連携、新たな言語教育の可能性として、メディア・リテラシーを視野に入れたAJとその教育方法を考える必要がある時代となった。

第12回 AJG 研究会 2007年6月16日(土) 13:30-17:30 東京国際大学早稲田サテライト 会員による発表

茂住和世(東京情報大学)：口頭発表用レジュメの作成指導について

門倉正美(横浜国立大学)：〈視読解〉としての図解——読み書きに図解を用いる試み

二通信子(東京大学)：大学での現実の読みにつながる読解学習の試み

[概要]

茂住：レジュメ作成の指導実践から、文章をレジュメ化する作業に必要な力は、重要なポイントやその比重を抑えることのできる読解力、内容同士の関係を考え、その階層を組み立てられる構成力、簡潔な上限で箇条書きできる表現力であることがわかった。

門倉：視読解の例と図解の特徴、日本語教育への応用を資料によって提起。

二通：教室外の現実の読みにつながるクリティカルリーディングを含めた読解学習の実践。新聞記事の紹介と比較的長い論説文の読解という二つの例で、伝えるために読む、理解したことを自分の言葉で表現、長い文章の概要の把握、学生主導の読解学習を目指し、学生自身の読みの実現、読解学習におけるクラスの役割などが収穫となった。

[考察] 詳細な授業の展開の仕方など具体的なAJ教育方法論、また、教材例が示され、それぞれの授業実践の参考となるものであった。

第13回 AJG 研究会 2007年10月27日(土) 13:30-17:20 東京海洋大学品川キャンパス

実践報告：嶋田和子(イーストウエスト日本語学校)

テーマ：初級からのアカデミック・ジャパニーズ教育

ワークショップ：吉田新一郎

テーマ：新しい「読み・書き」(プラス「聞く・話す」)の教え方

[概要]

嶋田：日本語学校におけるAJ実践について、具体的授業展開を紹介しながら、成長する教師を目指して初級からのAJを取り入れることの提起。

吉田：ライティング・ワークショップの実践を中心に、通常の国語の作文の授業との比較、

よく学べるときはどんな時か、どういう条件があったから私たちは話せるようになったのか、言葉を学ぶ時の条件、**学びの原則**について理解、プロの教師は、教えることより学ぶこと・生徒が**主体的に取り組む**にことを重視し、同僚と協力、教えることから絶えず学んでいる、などを紹介。ライティング体験とその振り返りを行った。

[考察]AJ教育の連続性という意味で、日本語学校の実践は活動と合致する。また、AJワークショップは理念の構築として「学び方を学ぶ」という意味で示唆的であった。同時に、教育方法論として、ライティング体験が応用できる。

第14回研究会 2008年2月9日 13:30-17:30 武蔵野大学

実践報告：堀井恵子（武蔵野大学）

テーマ：留学生の就職支援のためのビジネス日本語教育とアカデミック・ジャパニーズ

ワークショップ：野田尚史（大阪府立大学）

テーマ：『日本語を書くトレーニング』『日本語を話すトレーニング』とアカデミック・ジャパニーズ

[概要]

堀井：近年、留学生の就職支援のためのビジネス日本語が注目されているが、ビジネス日本語（以下BJ）教育実践を紹介、AJとBJの共通点が**問題発見解決能力**であり、BJはAJの延長上にあることを述べる。

野田：日本語による情報伝達を練習する2つのテキストを使った授業体験をし、テキストの方針や特徴を話し合い、発表。『日本語を書くトレーニング』『日本語を話すトレーニング』では、**実用的**な文章例、会話例の悪い点を見つけ、よい例をあげることで**問題発見解決**を行う、その際、**読む人/聞く人のことをよく考える**ことを大切にしている。正解を知るより自分たちで**考える**ことを大事にしているため、正解はつけていない。

[考察]AJ理念の中心となる問題発見解決能力にポイントを置いている点、また、自分で考えることを大切にする、相手が不快にならないコミュニケーションのトレーニングはAJ教材例であり、また、教育方法論につながる。

第15回AJG研究会 2008年6月14日（土）13:30-17:30 東洋大学白山キャンパス

講演：川上郁雄氏（早稲田大学大学院）

テーマ：「アカデミック・ジャパニーズ」を開放する—JSLの子どもと大学生を対象にした二つの実践の重なりと相違点—

[概要]大学生を対象にした「アカデミック・ジャパニーズ」の実践とJSLの子どもを対象に「ことばの力」を育成する実践を比較検討、大人と子どもという違いはあっても、めざす力の育成において、**共通するもの**もあるとすれば、「アカデミック・ジャパニーズ」とは何かを具体的な例をもとに考察。アカデミック・ジャパニーズからアカデミック・リテラシーへ、学習者の成長の過程と主体性の育成、そしてリテラシーの育成へと発展した。

[考察]AJ理念という点で、年少者日本語教育では、まだ母語でアカデミックな言語力を獲得していない学習者の**学習言語能力**をいかに育成するかが課題であるので、その研究はAJ研究とクロスする。

第16回 AJG 研究会 2008年11月8日(土)13:30-17:30 東京海洋大学品川キャンパス
研究発表 石毛順子(亜細亜大学留学生別科非常勤講師)

テーマ:「発話思考法を用いた、日本語学習者の作文過程の検討」

ワークショップ: 佐藤勢紀子氏(東北大学教授)・大島弥生氏(東京海洋大学准教授)

テーマ:論文読解・作成への導入ーサンプル論文を補助教材としてー

[概要]

石毛:第二言語の作文活動を心理学的な観点からとらえ日本語教育の現場に即した提案を行っていくため、**作文を書きあげるまでの学習者の活動と第一言語の使用状況**を発話思考法によるデータで分析、学習者のレベルと作文の成績の視点から明らかにした。「行きつ戻りつの過程」がカギとなる。

佐藤・大島:セッション1:学部生の論文読解では「**論文、初めて見た!**」書き言葉に驚かない・構成要素と表現をつかむ」と題して、**学部2・3年次の留学生の課題**をあげ、「論文理解・産出」への足場かけとして「**構成要素**」「**表現**」と慣れるための「**研究行動**」を大きくつかむための授業を紹介、タスク体験を話し合う。セッション2:**研究留学生の論文作成『留学生の日本語④』+サンプル論文**ー「**研究します。でも、研究って、なにをするの?**」論文の構成を知る、要旨のパターンを見出す」と題して、多様な専門分野の学生からなるクラスで効果的に論文の読み書きの導入を行う方法について、教材とサンプル論文により構成と要旨パターンを探るタスク体験を話し合った。

[考察]AJ教育内容体系、教材例、教育方法論につながる具体的実質的な授業実践の紹介と体験により、今後のAJ授業実践への参考となった。

第17回 AJG 研究会 2009年2月7日(土)13:30-17:30 武蔵野大学

ワークショップ: 林義樹先生(日本教育大学院大学教授)

テーマ:「参画教育とラベルワーク」

[概要]ITの進展で学びの条件が整った。**創造**とはその時点までその個人(グループ、集団など)が考え(行わ、実現し)なかったことを考える(行う、実現する)こと。暗黙知にも注目し、自己の**知**を更新することが学びのモードの大拡張であるが、「**学びの場**」への**主体的参加**の3段階として、参集・参与・参画がある。**参画**とは関係者と全体像を共有しながら、計画段階から実施・評価・伝承の段階に至るまで、場作りそのものに関わり、自らその部分を担い、全員の創意工夫を生かして、世界に開かれたオープンマインドで主体的に参加することであるが、一般的な「参加」から「参画」への移行を促す策として、**ラベルワーク**を考案した。ラベルワークでは、人間の情報力が引き出され、人格力、組織力、現場力が活性化されて、ごく自然に参画モードが出現するよう工夫されている。ワークショップではラベルワーク身に体験とその振り返りを行った。

[考察]AJ理念に通じる、主体的な学びと創造についての講義は説得力があり、また、それを導くラベルワークの手法はAJ教育方法論でもある。

(堀井 恵子 ほりい けいこ・武蔵野大学・k_horii@musashino-u.ac.jp)

参考文献

門倉正美他(2003)『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』日本留学試験が日本語教育に及ぼす影響に関する調査・研究—国内外の大学入学前日本語予備教育と大学日本語教育の連携のもとに、平成14年度—16年度科学研究費補助金基盤研究費(A)(1)研究中間報告書

門倉正美他(2005)『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』(2)日本留学試験が日本語教育に及ぼす影響に関する調査・研究—国内外の大学入学前日本語予備教育と大学日本語教育の連携のもとに、平成14年度—16年度科学研究費補助金基盤研究費(A)(1)研究成果報告書

門倉正美他(2006)『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』, ひつじ書房

AJG HP : <http://www.academicjapanese.org/sub6.html>